

跡見学園女子大学学芸員課程 平成26年度学芸員課程について

跡見学園女子大学 学芸員課程 主任教授

村田 宏

平成26年度の博物館実習の概要はつぎの通りである。

本学の博物館実習は、

- ①春学期における、通常授業時の基礎実習、一日の行程で実施する見学実習
- ②夏季（8月～9月）を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習
- ③秋学期における学外実習事後指導、および花蹊記念資料館を使用した事後実習

の三種類からなっている。

年度当初の見学実習は、世田谷美術館（東京都世田谷区砧公園1-2）で行われた。通常では足を踏み入れることのできない美術館のファシリティ部門を、学芸員の方の懇切な解説を伺いながら実地に見学できたことは、課程履修生にとってきわめて有意義な体験であった。

次に掲出するのは、見学に参加した履修者の「見学レポート」の抜粋である。

◆見学レポート —世田谷美術館の魅力—

4月6日、学芸員課程の博物館実習の授業の一環として世田谷美術館を訪れた。美術館開設準備室時代から在職されている高橋直裕学芸員のレクチャーは大変興味深いものだった。「プロの嘶家」さながらの巧みな話術には、学芸員として求められるひとつの要件のようなものさえ感じた。すなわちプレゼンテーション能力の高さということである。努力を積み重ねていけば、いつかは到達できる境地なのだろうか。私にはとても真似のできないことのように思われた。高橋学芸員のお話は、「裏話」的なエピソード満載だったが、とりわけ美術館設立の経緯についてのストーリーはとても印象に残った。

世田谷美術館は公園内に立地している。このため二つの大きな特徴がある。通常、美術館は保安上の問題もあり、出入り口は一カ所に限定されているのだが、1) 公園内のどこからでも来館者がアクセスできるように、世田谷美術館には6カ所の出入り口が設けられていること。2) また周囲の樹木の高さを超えない低層の建築であること、である。設計者の内井昭蔵氏の「自然と融合した美術館」の理念がうみだした珠玉の美術館、そう言ってよいのではなからう。内井氏は、当時、美術館建築の設計を手がけた経験はなかったものの、美術館建築委員会が、いわゆる「世田谷方式」（設計者の理念や思想を重視）によって内井氏を選抜し設計を依頼したのだという。設計者の細やかな配慮は、美術館のレストランが展示・収蔵スペースから離れていることにも窺われる。貴重な文化財を火災（火を使う厨房には火災の危険が伴う）や虫害（食べ物に虫が付着する）から守るという点できわめて有効な手だてと感じられた。

世田谷美術館の延床面積（8,233,500m）は、都道府県立クラスの広さだという。区立なのになぜなのか。高橋学芸員によれば、設立当時の世田谷区の人口が82万、つまり県と同じレベルの人口だったことを理由に、延床面積が算出されたのだという。面白い「理屈」である。

世田谷美術館には「美術大学」という講座が開講されていて、大学教員、アーティスト、評論家等を講師に多彩なプログラムが用意されているとのこと。また区内の小・中学校と連携して芸術鑑賞も行っているようで、教育普及が充実しているという印象を受けた。

今回の見学で楽しみにしていたもののひとつが、バックヤードの参観だった。収蔵庫への入室は、私たち履修生にはまさに希有の経験となった。収蔵庫に入る際に、入り口に置かれた「粘着テープ状」の敷物の上で足踏みをする。これはスリッパの裏に付着した微細なゴミを取り除くための装置である。収蔵庫に入るとまず前室がある。一種の緩衝地帯として、収蔵庫内の温湿度に急激な変化をもたらさない役割を果たしているようだ。収蔵庫では格子状の木材が壁面を覆い、コンク

リート壁との間に空気層を確保し、庫内の温度調整に一役かっている。また多くの作品の掛かったラックを目にすると、めざすものが容易に探しだせないのではないかと心配になるが、これはラックの支柱に白黒写真を貼るという工夫によって解消されている。作品の収蔵位置が分かりやすく示されているからである。

収蔵庫見学のアとは、おりから開催中の「岸田吟香・劉生・麗子」展を見学した。岸田吟香にまつわる豊富な資料に圧倒されたが、教科書でおなじみの《麗子像》がやはり気になった。以前から複製を見る限り、座敷童のように不気味な絵だと思っていたが、本物に接するとその印象がさらに強まった。黒や紺という暗い色調のなかに、麗子の上半身が浮かび上がるのである。



出品目録より転載

最後に、再び高橋直裕学芸員のお話を伺った。学芸員に必要な資質についてのアドバイスは貴重なものだった。「人とのコミュニケーション」——今までは、学芸員は見ることのプロであると同時に作品の良さを人々に伝える、いわば伝道師のような職業と思っていた。そのことは、おそらく間違いない事実なのだが、学芸員として活動していくために大切なのは、見ることのプロである以上に、作家であれ、画商であれ、地域の人々であれ、じつに多様なジャンルの人々と積極的に交流を持つ伸びやかな精神とフットワークの軽さであることが分かったように気がする。

盛り多い見学だった。高橋学芸員に感謝申し上げます。

当日、ご多用のなか案内いただいた世田谷美術館の高橋直裕氏には心より御礼申し上げます。

■春学期の基礎実習は、美術資料、民俗資料の取り扱い、写真撮影の基本を中心に行われた（専任教員1名、兼任講師2名）。必要な基礎的修練は相応に果たし得たと考えている。

◆夏季の学外実習

■夏季の学外実習は、以下の13館で行われた（順不同）。

家具の博物館 山崎美術館 東京富士美術館 東京都江戸東京博物館 埼玉県立歴史と民俗の博物館 弥生美術館
損保ジャパン東郷青児美術館 川口市立文化財センター 古河歴史博物館 郵政博物館資料センター 上野の森美術館
狭山市立博物館 青梅市立郷土博物館



実習を終えた感想のいくつかを示しておこう。

◆実習を終えて

- (1) 博物館が資料を保管し、かつ展示の企画を行うことは分かっているつもりだったが、自分が想像していた以上に「経営」に対する意識が求められると感じた。
- (2) 収蔵品に対する理解や展示方法の工夫はもちろんのこと、いかに地域の人々に貢献できるかが重要だと思った。博物館で働くことは、より多くの人々とコミュニケーションを図り、友好的な関係を築くことに他ならないと知った。
- (3) 物に触れているよりもむしろ話をしている方が多いと思えるほど、人との関わりが大切なのだと感じた。知識だけでなくコミュニケーション能力が必要なことを学んだ。
- (4) 専門分野の知識を身につけていれば業務はつとまるものと思っていたが、実際には、そうではなく、人との交流（ボランティアの方、学芸員の方等）が基本にあることを痛感した。
- (5) 専攻以外にも目を向け、幅広い視野をもつことが肝要だと思った。そしてコミュニケーション能力は必須だとあらためて感じた。

各館にはいつもながら懇切丁寧なご指導とご便宜を賜りました。あらためて厚く御礼申し上げます。

■秋学期は、夏季の学外実習で学んだ種々の事柄をふまえ、学期末の花咲記念資料館での模擬展示に向けて企画立案の作業にとり組む。履修者は民俗・歴史、美術の二班に分かれ、展覧会の実施計画を策定する。卒業論文提出の時期（12月中旬）と重なり、展示の準備が円滑に運ぶとはいえない状況で、履修生は知恵を出し合い、助け合いながら完成に邁進することになる。



博物館実習生模擬展示

会 期 平成27年1月27日(火)～2月9日(月)
場 所 跡見学園女子大学花菱記念資料館
開館時間 9:30～16:30(日曜は休館)
入館者数 449名

I 「日本の年中行事～季節を感じよう～」 展示室1

担当学生名 猪狩 志保 小野 沙織 片野 菜摘 高木 彩圭
高瀬 友美 増子のぞみ 町田 恵理 村田 美優

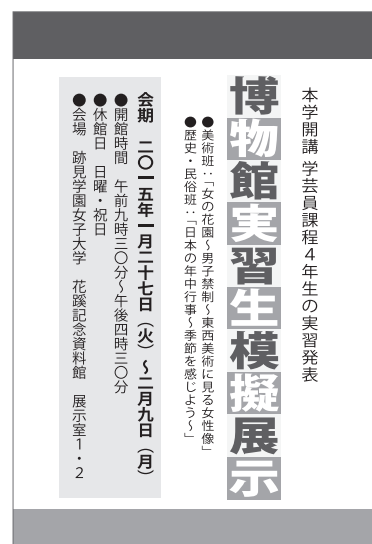
展示趣旨

日本の年中行事 ～季節を感じよう～

日本の年中行事は季節とともにあります。かつてお正月は初春とも呼ばれ、一月から春が始まるという捉え方がありました。しかし今回の展示では、現代の私たちが共有する季節感にもとづき、春の始まりを三月としました。三月から五月を春、六月から八月を夏、九月から十一月を秋、十二月から二月を冬として展示構成しています。

五節句は季節の節目に当たる日で、江戸時代には重要な年中行事とされていました。このような伝統的な行事を身近に感じられるように、現代の暦に合わせて展示を行っています。

展示を通じて、日本人の季節感や、自然や信仰に対するこまやかな情趣を再認識していただければと思います。



II 女の園～男子禁制～東西美術に見る女性像 展示室2

担当学生名 宇津木恵理 大川 友 小平実貴子 小野塚絢子
北住麻理子 齋藤奈々恵 染谷 綾 竹内 早紀

展示趣旨

女の園 ～男子禁制～ 東西美術に見る女性像

美しい女性の姿は、西洋においても日本においても、古来描き継がれてきました。そこに描かれる女性像には、芸術の中心的な担い手であった男性の理想が反映されています。

本展示では、女性の魅力が引き立つテーマを全4章に分け、東西の女性美を比較していきたいと思います。

第1章では、「女性の官能的な美しさ」に着目し、その特徴を顕著に示す西洋・日本双方の女性像を取り上げます。近代以降、女性表現について西洋と日本が互いに強く影響し合っている点も見どころです。

続いて第2章では、女性ならではの「表情」と「ポーズ・しぐさ」がテーマです。「表情」で取り上げるそれぞれの作品は、見方・解釈によって表情が違って見えてきます。「ポーズ・しぐさ」では、女性の私生活での自然な姿と、仕事で见せる作画的な姿のふたつの側面を見ることができます。

第3章では、絵画の背景に隠された女性美を「ストーリー」と「服装」の2つの観点から紹介します。「ストーリー」では、バックグラウンドを踏まえて作品を見ることで、絵の中の女性たちの魅力がもっと深まるでしょう。「服装」では、個性を発現させるための手段たるファッションに見られる西洋と日本の美意識の違いを追ってきたいと思います。

最後に、第4章では、第1章の女性の官能的な美しさとは対比的に、「あどけない無垢な少女」を描いた作品を選びました。取り上げる作品は、どれも少女にふさわしい明るい色彩で描かれています。

西洋と日本の女性像を対比することによって、東西の文化の違いに根ざした双方の美意識が際立ちます。作品を通して、東西十人十色の女性の魅力を楽しんでいただけたらと思います。

